

# 論 文

## 『経済学批判要綱』における資本の流通過程(上)

——流動資本と固定資本の諸規定の検討を中心として——

水 谷 謙 治

は し が き

第一章 資本の流通過程に関する「一八五九年プラン草案」の内容

第二章 流動資本と固定資本の諸規定について(一)

第三章 流動資本と固定資本の諸規定について(二)

第四章 総 括

補 章 再生産論に関する諸論述の検討

は し が き

『資本論』第二部「資本の流通過程」を十分に把握するためには、その母胎ともいえる『要綱』<sup>(1)</sup>での「資本の流通過程」に関する論述やそれにもとづいて作成された「資本の敘述プラン草案」<sup>(2)</sup>(一八五九年)の「Ⅱ資本の流通過程」について正確な理解をえておくことが必要である。特に後者においては、敘述すべきは三六の項目が提示さ

『経済学批判要綱』における資本の流通過程

れ、その諸項目について敘述してある『要綱』のページと行との指示がみられるので、この指示によって右の諸項目の主たる内容と関連を概括して表示すれば、当時マルクスが「資本の流通過程」をどのようにとらえ、またどのように展開しようとしていたかを研究するのに役立つにちがいない。

この作業をおこなうばあい、流動資本と固定資本に関する諸規定を『資本論』との関連で正しく整理してとらえることが一つのポイントになる。なぜなら、後述するように『要綱』にせよ「プラン草案」にせよ、この諸規定を軸にして資本の流通過程の展開がはかられようとしているからである。しかも、敘述は「一切がごたごたになつていて」（一八五八年五月三十一日付、エンゲルスへの手紙）全体の筋がつかみにくいだけでなく、右の諸規定自身もまだ十分に仕上げられていないように思われるからである（ちなみに、わたくしの知る限りでは、この点での固有の研究はほんの一、二しかなく、しかも十分には納得しがたいものである）。

そこで本稿では、『要綱』や「プラン草案」における資本の流通過程の理解——その課題、内容、構成等に関する理解——の一端をえられればという期待のもとに、「プラン草案」に関する前述の作業と右の流動資本と固定資本の諸規定の検討を行いたいと思う（表題には直接「プラン草案」の考察という面を示しえなかったが、それは単に表題が長すぎぬようにという配慮からにすぎない）。

なお、かつて私は、その主要部分が『剰余価値学説史』として公刊されているマルクスの二十三冊のノートを主たる対象にして、彼の「再生産過程に関する経済表」の成立過程や『資本論』第二部第三篇「社会的総資本の再生産と流通」の構想の成立について検討したことがある（『立教経済学研究』第二十卷第一号、第三号所載）。そのさいに、『要綱』での再生産論にかかわる論及の考察を除外したのは、そこではこの問題がまだ固有のものとしては提起されてお

らず、この問題に直接論及している箇所もほとんどみあたらずと考えたからである。しかしこの点は、『要綱』の敘述や「プラン草案」にそくして、より詳しく検討され証明されるべきであるし、再生産論に関して特に重要と思われる論及があれば、それらについても検討を加えておくべきであろう。

こうした諸検討にかつての研究を連係させるならば、マルクスの再生産論の形成過程をより深くとらえうるし、再生産論ひいては『資本論』をもより深く理解することができるであろう。本稿の考察は、こうした視角から『要綱』等の研究を行う過程で自らうまれた一産物である。総括がある程度この視角を反映した内容をふくんだり、補章で再生産論に関する個々の論及の検討が加えられたのもこの理由によっている。

(1) "Grundrisse der Kritik der politischen Ökonomie" (1857—1858, Dietz Verlag, Berlin 1953) 『経済学批判要綱』(邦訳、高木幸二郎監訳、大月書店、I—V)。以下の引用でことわりのない場合は、『要綱』からの引用とする。

(2) [Planentwurf von 1859 zur Abfassung des ersten Abschnitts des Kapitels vom „Kapital“ des „Dritten Kapitels“ von „Zur Kritik der politischen Ökonomie“ auf Grund der sieben Hefte des Manuskripts von 1857/1859] (S. 969—980, 訳> 1971—1972)。以下では「プラン草案」と略記する。

## 第一章 資本の流通過程に関する「五九年プラン草案」の内容

『要綱』当時、マルクスは、経済学の体系を周知の六項目の順序でとらえ、その「第一部資本」を「a 資本一般」。

b 競争または多数資本の相互に対する行動。c 信用。d 株式資本」というかたちで敘述しようと考えていた(一八五八年四月二日付、エンゲルスへの手紙)。このうち「a 資本一般」は、「1 価値。2 貨幣。3 資本」の三つにわけられ(同手紙)、「3 資本」はまた、「資本の生産過程、資本の流通過程、両者の統一または資本および利潤、利子」と

いうように叙述される予定であった(同年三月十一日付、エンゲルスへの手紙)。

「プラン草案」は、「3資本」についての「Ⅰ資本の生産過程」、「Ⅱ資本の流通過程」、「Ⅲ資本と利潤」という各篇ごとのさらに詳細な叙述プランであって、「1価値。2貨幣」を対象にした著書『経済学批判』の出版(二八五九年二月)直後、「3資本」の著述のために五七年と五八年の手稿全部を読みなおすなかで作製されたものである。

「資本一般」の叙述プラン中、第一篇と第三篇の具体的プランはいくつかみられるが、第二篇に関するプランは、現在までのところ右のものが唯一のものとされている。

このプランはつぎのとおりである(ページ数と行数の指示は省略する。また番号は便宜上引用者がつけたものである)。

#### 「Ⅱ 資本の流通過程

- ①資本の価値増殖過程は、同時にその価値喪失過程
- ②諸矛盾「このことは、第二章、諸資本の競争に属する」
- ③資本は、生産過程と価値増殖との過程としての統一である。
- ④資本の布教的傾向。
- ⑤資本の文明化傾向。
- ⑥生産と価値増殖とのあいだの矛盾。
- ⑦商品の貨幣への転化。
- ⑧資本の流通。(チャーマーズ)。チャーマーズに対して。ブレイク。

⑨ 生産過程、流通過程。

⑩ 遊休資本。

⑪ ささまざまな生産時間。

⑫ J・St・ミル。流通時間。(遊休資本)。

⑬ 資本の流通。

⑭ 流通費用。

⑮ 流動資本。固定された資本。それ $\wedge$ 資本の異なった経過的諸規定 $\vee$ より、二つの特殊な資本種類としての流動資

本と固定資本への移行。

⑯ 回転。いろいろな回転数。

⑰ 流通時間。

⑱ 商品資本、貨幣資本、産業資本。

⑲ 資本の回転の尺度としての一年。

⑳ 固定資本。流動資本。

㉑ 大流通と小流通。

㉒ 全流通は三重である。

㉓ 固定資本。流動資本。両者において、労働の社会的規定が資本におきかえられている。

㉔ 延長された流通時間 $\parallel$ 少なくなった再生産の回数、または生産過程にある資本の量の $\wedge$ 減少 $\vee$ 。連続性が、固定

資本にとって必然となる。中断は、だから前提された価値の損失。

25 固定資本と労働にたいする需要。(パートン)。

26 固定資本。社会における固定資本と流動資本との割合。流動資本よりも高次の位相。<sup>ポテンツ</sup>

27 固定資本の耐久性。

28 貨幣は、固定資本であり流動資本でもある。

29 個人的消費との関連での固定資本と流「動資本」。

30 総資本の平均回転(その価値増殖との関連で)。固定資本と流動資本の回転の割合。連続性。生産の中断の、流

「動」資〔本〕にとつてと固定資本にとつての区別。固定資本の再生産時間は、経済循環の尺度単位となる。総再生産局面。

31 流「動」資〔本〕と固「定」資〔本〕のさまざまな復帰。

32 その使用価値が流通に入りこむ固定資本。

33 固定資本と流「動」資〔本〕の生産。

34 固定資〔本〕の維持費。

35 固定資〔本〕と流「動」資〔本〕の所得。(固「定」資〔本〕と流「動」資〔本〕の還流)。

36 商品の使用価値による再生産時間の規定。「S. 976-977. 訳 V、一〇五ページ一〇八ページ」。

以下、右の諸項目に付されている『要綱』の該当ページと行との指示にしたがって、その諸項目の内容をごく簡単に要約してゆくことにしよう(異なる項目で指示ページが重複しているばあい、できるだけその項目にそくした内容

だけをそれぞれの項目のもとに要約し、かつ、内容上重複していると思われるばあいは、なるべく忠実に両方の項目にそれを提示するが、紙数の制限上、ある程度一方を省略することもある。

①「資本の価値増殖過程は同時にその価値喪失過程」(S. 306f.—310ss)

資本の価値増殖過程は同時にその価値喪失過程 (Entwertungsprozess) ・ その貨幣資格喪失 (demonetisation) としても現れる (生産力増加による生産コストの減少⇨現存する資本の価値喪失はここでの問題ではなくて諸資本の集積と競争の理論に属する)。ここであつかう価値喪失とは、資本が貨幣形態から商品形態に移行することに関するものである。資本が自己増殖するには、まず貨幣形態から使用価値形態に移行せねばならず、それによって資本の価値としての形態を失うのである。この価値喪失過程は価値増殖過程の契機をなすが、このことは過程の生産物はその直接の形態で価値ではなくて価値として実現されるにはまず流通に入らねばならぬことのうちに横たわっている。

資本の一つの過程から他の過程への移行はそれらの内的統一にもかかわらず偶然的であり、時間的にも空間的にも独立している。しかし生産全体は資本を基礎にしており、資本運動の全諸契機が実現されねばならぬから、大局的にはこの統一は実証されざるをえない。これまでに吾々が到達したところでは、資本はまだ流通を制約するものとしてではなく、ただ単に流通の契機として現れている。資本はいまや商品一般として商品と運命をともにする。それが貨幣と交換されるかどうかは偶然的なものとなる。

②「諸矛盾 (これは第二章の競争に属する)」(S. 307ss—310ss)

いまや資本は生産物・商品としてこの過程の外部にある流通に依存して現れ、かくてこの過程の外部にある制限が現れる。第一の制限は消費つまり商品に対する欲望であり、第二の制限は商品に対する等価物の存在である。いまや

生産過程は、それが流通過程に移行しえぬ限り、ぬきさしならぬものとなって現れる。資本はその全運動の必然的條件としての流通を前提とする。全生産物は貨幣に転化されねばならぬ。当面重要なのは、かかる矛盾を確認することであって、矛盾がいかに止揚、再生産されるかは別個の問題である。(單純な)流通上の諸矛盾が新しい形で復活する。

③「資本は生産と価値増殖との過程としての統一である」(S. 310<sup>a</sup>—312. 37~44, S. 313. 10—314. 39)

資本一般を扱うここでは、右の統一は直接的ではなく、外的諸条件とむすびついた一つの過程としてのみ存在することが問題である。資本家的生産は、一方では普遍的産業労働(剰余労働)をつくりだすと同時に、他方では自然と人間の諸性質の一般的利用の体系をつくりだす。資本はブルジョア社会をつくりだし、この社会の構成員を通じて自然と社会的関連の普遍的領有をつくりだす。ここから資本の文明化作用——資本による一つの社会的段階の生産がでてくる。生産力の発展。欲望の拡大。一切の制限の打破。

④「資本の布教的傾向」(S. 311<sup>a</sup>—36)

⑤「資本の文明化傾向」(S. 312—314<sup>a</sup>)

絶対的剰余価値の創造はたえず流通の園域が拡大することを条件としている。ある場所で行われた剰余価値は、交換されるために他の場所での剰余価値の創造を必要とする。流通は最初あたえられた大きさとして現れたが、ここでは生産を通じて拡大しつつある大きさとして現れる。この点からすれば、流通はすでに生産の一契機として現れる。だから資本は、一面ではたえずより多くの剰余労働を創造せんとする傾向をもつと同時に、より多くの交換地点を創造せんとする傾向をもつ。世界市場を創造せんとする傾向は直接に資本概念のうちにあたえられている。どんな限界も克服されるべきものとして現れる。他方では、相対的剰余価値の生産は、新しい消費の生産、流通内部での消



費の園域が拡大されることを必要とする。現消費量の拡大、現存の欲望の普及による新しい欲望の創造、新しい欲望の生産と新しい使用価値の発見と創造。こうして労働と生産の種類のたえざる発展と拡大、普遍的産業労働の創造と自然と人間の諸性質の一般的利用の体系の作出。ここからして資本の文明化作用（資本による一社会的段階の生産）が出てくる。

⑥「生産と価値増殖とのあいだの矛盾」(S. 3186—3197, S. 3226—32543)

まず、生産一般ではなく資本家的生産に制限がある点を把握すること。資本は生産の全制限をのりこえて前進する一般的傾向をもつが、他方では、この傾向と矛盾する生産の特殊な制限作用をふくんでいる。これは過剰生産の基礎、発展した資本の基本的矛盾を明らかにしておくために証明しておくものである。資本は労働と価値創造を無限に拡大せんとするが、他方では、賃銀をその最低限におさげようとする。資本にとっての必然的制限は、生きた労働力の交換価値の限界としての必要労働、剰余労働と生産力の発展の限界としての剰余価値、生産の限界としての貨幣、交換による使用価値の生産の抑制、等々である。しかし資本は、その一般的傾向からしてこれらの諸契機をみおとすのであって、ここから過剰生産が、これら一切の必然的諸契機の突然の回想がおこるのである。

⑦「商品の貨幣への転化」(S. 35110—35311, S. 4778—27)

資本は生産過程を通じて(一)価値増殖する、(二)価値離脱する(貨幣形態から商品形態への移行)、(三)剰余価値をふくんだ商品として貨幣と交換され新価値とともに自己増殖する。この第三の過程の現実的困難は資本一般を扱うここでは可能性としてのみ存在し、可能性においてのみ止揚される。そこで資本はいまや貨幣として指定され、貨幣は実現された資本という新しい規定で措定される。商品の一般的尺度としての貨幣の第一規定が、いまや剰余価値の尺度とし

て反復される。資本の貨幣形態はその第二形態（流通手段）という面からみると、流通手段一般としての貨幣のばあいのように消費の目的で商品（使用価値）と交換されるのではなく、資本として新たに流通をはじめるための特殊な使用価値（生産手段と労働能力）と交換されることによって規定される。流通に対して否定的にふるまう自立的価値としての貨幣の第三形態という面からみると貨幣は、自分に関係する価値の形態で商品となり流通に入る資本である（資本と利子）。この形態は以前の形態にある資本を想定し、同時に特殊な・現実的な資本への過渡をなしている。

⑧「資本の流通。（チャーマーズ）。チャーマーズに対して。ブレイク」（S. 4151b-44, S. 4943-4954, S. 5591b-5602, S. 6112b-6144, S. 6741-10, S. 72531-42）

貨幣流通は無限の出発点と復帰点とをもつが、資本の流通では出発点は復帰点として、復帰点は出発点として措定される。貨幣流通では貨幣が動かないものになると消滅するが、後者は無限の運動である。前者では価格措定が形式的であるのに、後者では現実的であり、また資本流通の全契機が資本の再生産の契機である。資本流通における形態転換と素材転換の場合、後者の面からみると貨幣は単に流通手段として生産と消費、生産と生産を媒介するものとして現れる。前者の面からみると、貨幣は価値増殖の名目的尺度として、またある局面に存在する価値として現れる。資本の運動としての流通を考察するここでは、資本はさまざまな概念的に規定された諸契機——商品資本、貨幣資本、産業資本——として措定され固定される。

チャーマーズは、資本主義生産の目的は価値（貨幣）であって商品、使用価値等ではない点を正しくついている。他方、資本の価値としての貨幣と現存する金属貨幣とを混同する連中の愚鈍さにおち入っていない。ブレイクは、流通貨幣量の増大等が価格の増大の結果であることを指摘している。また彼は、資本の一部がつねに遊休している点を

示している。なおニューマンは、全流通過程を「経済循環」とよんでいる。

⑨「生産過程、流通過程」(S. 41639—4273)

資本流通を全体として考察すると、二つの契機——生産と流通の過程——が資本流通の二大区分として現れる。生産部面での資本の滞留期間は生産力の発展と一致する(種々の諸資本を想定すれば、この滞留期間も流通の一契機となるが、ここではまだ多数の資本は扱わない)。第二の契機は、資本が生産物に転化してから貨幣になるまでの時間である。生産費用は直接的生産過程で対象化された労働時間プラス輸送にふくまれている労働時間に帰着する。輸送費から資本は剰余価値をひきださうだろうか? 輸送時間の一部は必要労働をこえた剰余労働時間だから、それは不払いである。ともあれ、同一資本が生産し輸送するとするならば、これらの行為は直接生産のなかに入り、流通は生産物が予定の場所にもちこまれてから開始される。生産が交換に立脚するに依じて交換の物的諸条件(交通手段と運輸手段)は生産にとって一層重要なものになる。そしてあらゆる空間的制限をのりこえてゆく資本の本性からして、こうした諸条件の創造が資本にとって緊急の必然事となる。この諸条件は低廉であることが要求される。そこでこの諸条件の「生産」が一資本家の事業として採算にあわぬことがある場合、これを株式会社が行ったり国家が資本の要求を代表して肩代りする。(価値増殖の固有の法則をもつ固定資本の一形態をなしているから、交通手段に特別の<sup>アップシユント</sup>一篇をさく要がある)。

⑩「遊休資本」(S. 47632—47811)

ベイリーは、遊休資本は流通速度が早くなることよってこれを流通に投じうるとのべ、一般にある国で資本が完全に使用されつくしているとすれば、需要が増加しても生産を増加させないだろうとのべている。また、遊休資本

概念が流通に属しているのは、流通にみいだされぬ資本は眠っているからである、ともいつている（以下、引用）。

⑪ 「*やまやまな生産時間*」 (S. 496s—497rs, S. 5602s—5622s)

これまでは生産時間は労働時間と一致するとされていた。しかし、たとえば農業では、生産物が完成するまでに労働の中断が生産の内部で生ずる。そのさい、一方で資本が遊休し他方で労働が休止する。生産過程の継続性と労働過程の連続性は一致するとは限らない。第二に、生産物が完成状態におかれるためには、かなり長時間を要するばあいがある（遠隔地へ送られるばあい等）。第三に、生産物の完成後（ブドウ酒のように）、自然過程にゆだねられるために長時間のあいだ生産物が遊休することもある、等々。こうしたばあい、より緩慢な復帰（この点が本質点だが）は、ここでは流通時間に由来するのではなくて生産過程の技術的諸条件に由来する。

⑫ 「*J・St・ミル。流通時間。（遊休資本）*」 (S. 5102s—5123s)

彼のわずかばかりの独創的見解とみられる点——つねに資本の巨大な部分が遊休している。もしある国で全商品が平均してその生産期間と同じ期間だけ販売されないでいるならば、その国の生産的資本の半分だけが真に資本機能を果していることになる。資本の巨大な部分がたえず使用されずにいることは、われわれが分業に支払う価格である。また大方の商人にとっては、追加の顧客は彼らの生産的資本の増加に等しい。商人はこの顧客らの資本のうち遊休していた部分を資本に転化しうる——。

⑬ 「*資本の通流*」 (S. 5123i—5146, S. 72534—37)

われわれは生成した資本から出発するから、資本はつぎの局面を通過する。1 直接的生産過程、2 生産物の商品への転化、3 一般流通への商品の流入（販売）と貨幣の流通（生産諸条件への再転化）、4 生産過程の更新（追加資本の生

産過程)。この運動を考察するならば、資本は一般的流通の契機をなし、また一般的流通は資本によって措定されて現れることがわかる。資本の総生産過程は、本来的流通と本来的生産過程をふくみ、資本の運動は一面では労働時間、他面では流通時間として、そして全体は両者の統一として現れる。この統一はまた、資本の一つの回転・自己に復帰する一つの運動経過ともみなしうる。経済循環。

⑭ 「流通費用」 (S. 513<sub>10</sub>—529<sub>9</sub>, S. 562<sub>29</sub>—565<sub>9</sub>)

流通時間が問題になるのは、資本の生産時間との関係・制限においてだけである。さしあたり確認したいことは、本来的流通の諸費用(種々の経済的契機を通過させることから生ずる諸費用)は生産物の価値になにも付加せず、価値からの控除にすぎない点である。貨幣の空費も同様である。資本価値の流通は、種々の局面をとおしての形態諸変換であり、この過程の経続時間が流通の・交換上での生産の・費用に属する。だからこの生産の空費は、資本に立脚する生産の内在的費用に属するものであって、J・St・ミルのようにこれを分業の必要価格とみなすのは誤りである。流通時間=0と措定することは、資本の必然的傾向である。

⑮ 「流動資本。固定された資本。それへ資本の異なった経過的諸規定」より、二つの特殊な資本種類としての流動資本と固定資本への移行」 (S. 514<sub>14</sub>—517<sub>16</sub>, 534<sub>18</sub>—536<sub>44</sub>, 590<sub>13</sub>—20)

資本の総運動=全姿態変換の諸局面を包括し、この運動中で自己を維持・拡大する主体としての資本は流動資本である。このばあい、流動資本は資本の特殊形態ではなく、運動の主体としての・流通と生産との動的統一として・より進んで展開された資本そのものである。同時に、資本はどの局面でも、ある規定性で措定され特殊形態に封じこめられている。資本のこの特殊形態での固定は、全運動の主体としての資本の否定であり、非流動資本であり、固定

資本である。だから区別はさしあたり、同一資本の異なった形態上の規定であり、二つの特殊な種類の諸資本の区分ではない（この点は経済学上で多くの混乱をおこしてきたが、右の区分を資本一般の形態規定としてつかむことは絶對重要である。そうでないと、資本をより大きな生産へかりたてる必然性をはじめ、資本の一回限りの流通時間とは区別される経済循環の諸時期、新需要の作用、その他の多くの現象がわからなくなる）。

つぎに二つの特殊な資本種類としての固定資本と流動資本への移行。さきほどまでは、両資本はただ資本の異なる経過の規定にすぎなかったが、それらはいまや二つの特殊な種類の資本として硬化して実存する。一個の資本が考察される限りでは、資本は生産過程に止まる資本と流通にある資本という二部分にわかれて現れる。生産過程での区分——素材面からの資本区分——が形態規定に入ってくる。ところで、以上の諸点を詳論する以前に、経済学者たち（J・St・ミル、アンダーソン、セー、ド・クインシー、ラムジー等）による区別の仕方をみてゆく（以下、その考察）。

⑯「回転。いろいろな回転数」(S. 517a—52410, 5462—55915, 60515—60840)

資本の一回転は生産時間プラス流通時間。一回転で生じた価値は生産過程で生じた価値に等しいから、資本の諸回転からなる循環では、創造された価値総額は労働時間に正比例し流通時間に反比例する。

$$q \text{ (回転数)} = \frac{Z \text{ (1年)}}{P \text{ (生産局面)} + C \text{ (流通局面)}}, \quad \text{総剰余価値} = S \text{ (剰余価値)} \times nu \text{ (nは回転数, nuは1回転)}。$$

⑰「流通時間」(S. 52011—52299)

生産過程の更新が流通時間で規定され、流通時間が価値増殖の重要な一契機になることは、資本の本性から生ずることである。資本の大きさが流通時間で補われるかにみえ、流通時間が生産的であるかのような仮象が生じてくる。

他方、資本の必然的傾向は流通時間をもたない、流通であり、この傾向は信用と資本の信用機構の基本規定である。

⑮ 「商品資本。貨幣資本。産業資本」(S. 5316—5332a)

資本の価値はその運動過程で、右の三つの姿で現われる。資本は流通(W—G、この記号は引用者のもの)によってのみ純粹な価値の形態に再転化されるし、資本の生産過程の反復も貨幣と生産条件との交換によってのみ可能になるから、流通は資本の概念に属している。そして資本のかかる諸変態の運動は、いまや生産過程の条件及び結果として現れてくるから、資本は一定期間における一、系列の、回転として現れる。だから資本の価値産出は、つぎの制約——質的制約(流通をへないと生産を更新しえぬ)と量的制約(価値分量が回転数でさまる)——をうけるものとして現れる。他方、流通によって資本の諸関連・社会的関係が隠蔽される。

⑯ 「資本の回転の尺度としての一年」(S. 5332b—53410)

⑰ 「固定資本。流動資本」(S. 53418—5424, 5707—58637, 60915—61124, 6154—6209, 6255—6303a)

固定資本と流動資本の区分についてのさきの経済学者らの見解(⑮)のつづき。リカード、シスモンディ、シュルピユリエ、シュトルヒ、セー、スマイス、ローダーデル、等。

⑱ 「大流通と小流通」(S. 56514—56945)

総過程の内部で大流通と小流通とを区別しうる。前者は、資本が生産過程からでるときから復帰するときまでの全期間をふくみ、後者は連続的で生産過程と同時に行われる資本としての賃銀部分・労働者の給養品(Provisionnement)としての資本部分・の流通である。労働者の給養品は、生産過程には入らないから、原料や用具と区分される流動資本である。ここに資本循環に消費が直接入ってくる唯一の契機がある。またここでは、生きた労働能力とこれを維持する自然的条件とに対する資本の関係によって、流動資本が使用価値の面からも規定されることがわかる。

⑳ 「全流通は三重である」 (S. 5707—57120)

全体としてみると流通は三重に現れる。(1)総過程、資本がその異なった諸局面を通過する過程—全諸契機を通過しつつある主体としての流動資本と一つの契機に固定されたものとしての固定資本。かかる固定存在の諸様式は、商品資本、貨幣資本、生産条件としての資本、を構成する。(2)資本と労働能力とのあいだの小流通、この流通に入りこむ資本部分—給養品はすぐれて流動資本である。(3)大流通、生産過程外部での運動。生産局面からであるかどうかによって、流動資本、固定資本の区分が生ずる。固定資本は大流通に由来するがそれに復帰しない。以上三つの区分から、固定資本と流動資本についてもNo. 1からNo. 3の区分が生ずる。No. 3はNo. 2をふくむが、No. 2はNo. 3をふくまない。ついでNo. 3の規定内部での詳細な考察。このさいには固定、流動の資本区分に素材的側面が入ってくる。原料は流動資本に属し、用具材は固定資本に属する。

㉑ 「固定資本。流動資本。両者において労働の社会的規定が資本におきかえられていぬ」 (S. 58638—5909, S. 60327—6047)

固定資本の量的範囲や作用度の発達は、資本による生きた労働の支配力の発展度を示す。他方、労働者の消費のための素材転換が、資本の素材転換として、流動資本のうち彼らに譲渡される部分の属性として、現れる。流動資本において種々の労働相互の社会的関連が資本の属性として措定されることは、固定資本において労働の社会的生産力が資本の属性として措定されるのと同様である。

㉒ 「延長された流通時間—少くなった再生産の回数、または生産過程にある資本の量の減少—連続性が、固定資本にとって必然となる。中断は、だから前提された価値の損失」 (S. 59038—59120)



右のことからして、固定資本の發展規模が大きいほど、生産過程の連続性が必然的条件となる。

②⑤ 「固定資本と労働に対する需要。(「バートン」)(S. 6721—6)

固定資本はできてしまえば労働需要に影響しなくなるが、作られているあいだは、同量の流動資本や所得が雇用するのと同人数に仕事をあたえる(この主旨に関するバートンの見解の引用)。

②⑥ 「固定資本。社会における固定資本と流動資本との割合。流動資本よりも高次の位相」(S. 59035—59425, S. 59432—59529, S. 59643—59725, S. 59726—5988)

固定資本の生産により多くの時間が費やされる条件↓剰余人口と剰余生産。近代的生産の不断の過剰生産と過小生産は、流動資本の固定資本への転化における不均衡に依存している。流動・固定資本の生産に使用される労働時間の比率は、必要労働・剰余労働時間の比率と同様である。固定資本の生産が、生産のための生産に向けられる限り、資本は固定資本の生産のばあいこそ流動資本の生産のときよりも高次のポテンツで自己目的として自らを措定する。この面からすれば、固定資本生産が総生産に占める範囲は、資本家的基礎上での富の発達の尺度基準である。

②⑦ 「固定資本の耐久性」(S. 59813—5992, S. 6516—65328)  
固定資本が耐久的なほど、労働生産力、資本として作用する。一方で固定資本の総価値を増加させる資本の傾向と、その各比例分割部分の価値を減少させる資本の傾向。

②⑧ 「貨幣は固定資本であり流動資本でもある」(S. 6048—20)  
貨幣は流通用具として役立つ限りは固定資本だが、つねに流通過程に固定されている資本部分という面からみると、流動資本の完成形態である。

⑲ 「個人的消費との関連での固定資本と流〔動資本〕」 (S. 60421-22)

固定資本は使用価値として流通に入らないことは、固定資本が個人的消費の対象にならないことを示している。

⑳ 「総資本の平均回転(その価値増殖との関連で)。固定資本と流動資本の回転割合。連続性。生産の中断の、流〔動資本〕にとってと固定資本にとっての区別。固定資本の再生産時間は、経済循環の尺度単位となる。総再生産局面」 (S. 60515-60840)

一万ポンドの総資本中、固定資本と流動資本が半分づつで前者は五年に一回転、後者は年に一回転するとするならば、一年に六千ポンドが回転するから、総資本は二〇カ月で回転する(こうした回転時間が妥当するのは、ただ生産過程の反復(剰余価値の創造)に対してであって資本それ自身の再生産についてはない。回転速度が資本の大きさに置き代わっている)のであり、このことは価値増殖を規定するものが動員される剰余労働量だけであって、対自的な資本の大きさを示している)。資本のうち、固定部分が大きいほど、流動部分の回転数はより多くならねばならぬし、資本がその流通軌道を経過するのに要する総時間が一層長くなる。だから固定資本部分の発展に応じて、生産の連続性が資本の必然的条件になる。流動資本にとっての中断は、剰余価値生産上での中断だが、固定資本のばあいは、その使用価値が破壊される限りでは、固定資本価値自身の破壊である。固定資本の介入により、回転時間の単位は、固定資本の再生産時間とそれが価値として流通に入り価値総体において流通から復帰する総流通時間で規定される。固定資本の大きな発展以来、十年前後の期間で産業が通過する循環が、このように規定された資本の総再生産局面と関連していることは明らかである。

㉑ 「流〔動〕資本」と固〔定〕資本とのさまじまな復帰」 (S. 60841-61019)

流動資本は短期間に全部的に流通するのに、固定資本は長期間に断片的に還流する。固定資本が還流するのは、一般に生産物したがって流動資本に転置される限りでだけである。

② 「その使用価値が流通に入りこむ固定資本」 (S. 610<sup>a</sup>—613<sup>b</sup>)

運輸手段のように、購買者が直接その使用価値に対して支払うような固定資本の形態がある。この固定資本は、生産過程で交通手段として役立つと同時に、消費手段・使用価値としても役立つ。固定資本がそれ自体の形で販売される。

③ 「固定資本と流〔動〕資〔本〕の生産」 (S. 613<sup>b</sup>—614<sup>a</sup>)

生産はそれ自身の諸条件を再生産するから、生産過程内部での資本の本源的区分は、資本の諸部分が特殊な諸資本として活動するというように現れる。つまり資本は、固定資本、流動資本として再生産される。いま重要なことは、資本の生産が一定の諸部分の形で、固定資本と流動資本の生産として現われる結果、資本自体が固定資本と流動資本としての資本の二重の流通様式を生産するということである。

④ 「固定資本の維持費」 (S. 620<sup>h</sup>—21)

右の維持費の一部は、固定資本が活動するために消費する用具材である。それは生産過程の内部で考察した固定資本に属する。

⑤ 「固定資〔本〕と流〔動〕資〔本〕の所得。 (固〔定〕資〔本〕と流〔動〕資本の還流)」 (S. 620<sup>g</sup>—621<sup>aa</sup>, S. 621<sup>z</sup>—622<sup>3a</sup>)

あらゆる資本は一種の流動資本形態でのみ還流する。固定資本は価値として流通に入りこむのに応じて価値として還流するから、それは一種の流動資本形態で還流するにすぎず、またかかる形態でのみ所得をもたらす (固定資本と

流動資本が、所得をもたらす形態上の差別は——所得一般の考察とともに——まだここには属さない。それら資本の還流様式の差別と、それらが資本の総回転、資本の再生産運動一般に作用を及ぼすその様式の差異だけがここに属す(2)。

③6 「商品の使用価値による再生産時間の規定」(S. 630<sub>27-32</sub>)

再生産局面は、使用価値によって種々の限界をもつことがある(小麦、牛乳、家畜等の実例)。価値と使用価値の再生産は一部は一致し、一部は一致しない。(諸項目の傍点は全て省略した——引用者)

× × × × × × ×

以上が「五九年プラン草案、Ⅱ資本の流通過程」(以下「流通篇」と名付けておく)の内容のごく簡単な要約である。この要約をみてみると、おおよそのところではあるが、「流通篇」は内容的につきの三つの部分に大別しようように思われる。

(一)項目①から⑤まで、(二)項目⑥から⑭まで、(三)項目⑮から⑳まで。

(一)の主たる内容はつぎの三点にまとめうる。すなわち、

第一。いかにして資本が剰余価値をつくりだすかをみてきたので、今度はこの過程の産物たる資本の流通が問題になる。そのさい、資本の前提になっていた単純流通は、資本によって規定されたものとして現れる。

第二。資本の流通過程は、主体としての資本価値がとらざるをえない形態諸変換の過程であり、資本にとっての本質的制限・条件をなしている。生産過程で増殖した資本は、流通過程でその価値を実現し、新たな生産要素に転形してゆかねばならず、資本はこの二局面を通してのみその生涯を生きうる点で、資本の総運動過程はこの二過程の統一

にほかならない。

第三。二つの過程の一方から他方への移行はその内的統一にもかかわらず、時間的にも空間的にも独立化している。いまや単純流通での矛盾がすべて新たな形で復活する（ここではこの矛盾の確認に止め、この矛盾がいかにか止揚されるかはあつかわない）。資本は過程として生産と価値増殖との統一であり、無限に自らを拡大しようとする傾向をもつと同時に生産の特殊な制限をもふくんでいる。資本がこの必然的制限をみおとすことから、過剰生産——これら一切の必然的契機の突然の回想——がおこる（以上は過剰生産の基礎を明らかにしておくために証明せんとするもの）。

(二)の主要点はつぎのとおりである。

第一。単純な貨幣流通と資本流通との区別と関連、資本流通で貨幣がうける新たな諸規定。流通する資本の諸姿態は、貨幣資本、商品資本、産業資本。生産過程と流通過程との統一としての資本運動は、資本の循環ないし回転である。

第二。生産時間と流通時間、流通費や運輸費等に関する諸規定。

第三。遊休資本、固定資本と流動資本等の概念規定——姿態諸変換をつづける資本価値＝流動資本、一姿態へ固定された資本＝固定資本。固定化され遊休化されて不生産的だということが、資本に生産拡大の傾向をもたらせる。

(三)は、さらに三つの小部分（項目⑮—⑳、㉑—㉒、㉓—㉔）に細分してとらえうる。

第一の部分（⑮—㉔）の要点。(二)の流動、固定資本の規定が素材的視点を入れられることにより、特殊な資本種類としての流動資本、固定資本の規定として発展させられる（これに関する諸学説の検討）。価値増殖に及ぼす回転の諸作用。資本流通が一系列の回転として現われ、資本の生産過程の量的、質的制約をなし搾取を隠蔽する。また総括的にみると、資本の流通過程は三重の流通——総過程、大流通、小流通——として現れ、それらに応じて流動資本と

固定資本の諸規定がでてくる。

第二の部分(23—26)では、要するに固定資本と流動資本の発達の意義——前者にあつては、労働生産力が資本の属性になり、固定資本の発展が生きた労働への支配の発展を表すこと、固定資本の規模拡大により生産の連続性が不可避的条件となること等——が考察されている。

(3)この考察は、同「プラン」の「資本の生産過程、3)相対的剰余価値、r)機械装置」に関する考察と相当に重複し、『資本論』では、ほゞ、「第一部」に吸収されていると思われる。右の箇所は指示ページがこと同じであったり、指示ページは違つてもその内容が(可変資本、不変資本という視角からとはいえ)ほゞ同主旨であることも、このことを示している。

第三の部分(27—36)は、第一の部分の継続であり、価値増殖に及ぼす回転の作用、固定資本と流動資本の諸側面に関するより詳細な考察を行う部分である。

ところで、以上の三大部分からなる「流通篇」の一特徴点として、流動資本、固定資本の概念が全展開のいわば軸になっていることがあげられる。

このことは、『要綱』における「資本」の敘述プランにも端的に示されている。すなわちここでは、生産過程をあつかう「(一)資本の一般性」に対して、「(二)資本の特殊性、すなわち流動資本、固定資本」(S. 186)とか、「(二)資本の特殊化、すなわちa)流動資本、固定資本。資本の流通。(三)資本の個別性、すなわち資本と利潤。資本と利子。…」(S. 186)とのべられている。

また、こうした点を「流通篇」のさきの三大部分にそくしていうと、序論的部分ともみなしうる第一部分(①—⑤)を別にすれば、あとの部分では同じ流動資本、固定資本という概念の二重、三重に相異なる諸規定を中心にして、資

本の流通上の諸問題が展開されている。そして、第二の部分(⑥—⑭)は『資本論』第二部第一篇の内容に、第三の部分(⑮—⑳)は第二篇の内容にほぼ照応しているように思われる。

そこで、こうした点を考察するために、右の流動資本と固定資本の二重、三重の諸規定およびその関連について立ち入った検討を加えてゆくことにしよう。

## 第二章 流動資本と固定資本の諸規定について(一)

流動資本と固定資本の規定には、大別して、仮に「一般的規定」と「特殊的規定」とでも名付けうるような二様のものがある。それらは、『資本論』の流動、固定資本の規定とは異った側面をもっているようにみえるし、まだ十分に整理されておらず、多くの問題をふくんでいるようにもみえる。それゆえにまず、右の二つの規定とその関連から洗ってゆくことにしよう。

### 流動資本と固定資本の「一般的規定」

前章でみた「流通篇」の要約(特に⑮)からも明らかなように、第一の規定は、たえざる運動主体としての資本の二側面——資本が種々の局面・諸契機を通じての運動そのもの(諸局面の統一)として現れるか、個々の局面・契機として現れるかという二側面——からの規定である。すなわち、資本は貨幣、商品、生産諸条件という種々なる姿態をとりつつ運動する主体そのものだという面で流動資本と規定され、他方、それらの諸姿態に固定され拘束されているという面で固定資本と規定される。<sup>(4)</sup>

(4) 『要綱』では“Capital Circulant”と“Zirkulierendes Kapital”という用語が無區別にもちいられており、訳書も同じ語を時には流通資本、時には流動資本としている。以下では訳書に従いつつ便宜上、前者のばあいにはC.C.、後者のばあいにはZ.K.という記号をつかって、訳語のあとに( )に入れておく。

つぎに、この点をより十分につかむために、右の規定を最もよく特徴づけていると考えられるいくつかの諸敘述をみることにしよう。

1 「……資本はいまや、それがあるときは貨幣として、あるときは商品として、あるときは交換価値として、あるときは使用価値として現れる諸契機などの点においても、こうした形態変換のうちに自己を形式的に維持する価値としてばかりでなく、自己を増殖する価値として、価値としての自己自身に關係する価値として措定されている。ある契機から他の契機への移行は特殊な過程として現れるが、これらの過程はそのどれもが他の過程への移行である。したがって資本は、いずれの契機においても資本であるところの過程しつつかある価値として措定されている。こうして資本は、流通資本 (Capital Circulant) として、すなわちいずれの契機においても資本であり、ある規定から他の規定に循環しつつかある $\wedge$ ところの資本として $\vee$ 措定されている。……資本はすべて、もとと流通資本 (C.C.) であり、流通の生産物であるが、また流通を生産するもの、それ自身の軌道として流通を描くものでもある」(S. 435)。

2 「資本の総生産過程は、本来的生産過程と本来的流通過程とをふくむ。それらは資本の運動の二大段落 (Abschnitt) をなし、またこの資本の運動はこれら二つの過程の総体性として現れる。……運動全体は、労働時間と流通時間との統一として、生産と流通との統一として現れる」。「この運動のさまざまな諸局面を包括し、この運動



のなかで自己を保持し、価値を倍化させる主体としては、……こうした諸変態の主体としては、資本は流動資本（C.C.）である。したがって流動資本はまず第一に、資本の特殊な形態ではなくて、描かれた運動……の主体としての、よりすすんで展開された規定での、ほかならぬその資本なのである。だからこの側面からみれば、どの資本もまた流動資本（Z.K.）である」（S. 513—514）。「だが資本がこのように流通の全体としての流動資本（Z.K.）であり、ある局面から他の局面への移行であるとするれば、同様にまた資本はどの局面においてもある規定性で措定されているとともに、また特殊な姿態に封じこめられているのであって、このような特殊な姿態は全運動の主体としての資本の否定なのである。だから資本は、どの特殊な局面においてもさまざまに変換の主体としての資本の否定である。非流動資本。固定資本（Fixes Kapital）、……局面の一つに固定されているところの、本来固定された資本」。「あらゆる局面を通過する主体としての、流通と生産との動的統一……としての資本は、流動資本（Z.K.）である。それ自身がこれら諸局面のそれぞれに束縛されたものとしての、資本の諸区別のうちにおかれたものとしての資本は、固定された資本であり、拘束された資本（Engagiertes Kapital）である。資本は流動資本（Z.K.）それ自体として固定され、またそれは固定された資本として流通する。だから流動資本（C.C.）と固定資本の区別はさしあたりは、資本が過程の統一として現れるか、それとも過程の一定の契機として現れるかにしたがっての、資本の形態規定として現れるのである。休止資本（Capital Dormant）、遊休資本（Brachliegendes Kapital）の概念は、資本がこれらの諸規定の一つに遊休しているということだけに關係しうるのであって、資本が部分的につねに遊休しているということは、資本の条件である」（S. 514—515）。

3 「以上のように、流動と固定という規定はさしあたりは、二つの規定のもとで、すなわち一度は過程の統一と

して、つぎには過程の特殊な局面として、措定された資本それ自体、言いかえれば統一としての自己からの区別としての資本それ自体——諸資本の二つの特殊な種類、二つの特殊な種類のかたちでの資本ではなくて、同一資本の異った形態上の諸規定——以外のなものでもないものであるが、このことは統制学において多くの混乱をひきおこしてきた」(S. 515)。「かくて、う流動しつつあるとは、あたかも資本が生産局面とは区別された本来の流通局面に存在するかのような意味ではなくて、資本の存在するその局面は、よどみのない、(Elastic)局面、他の局面へ移行しつつある過程を通過しつつある局面であるということ

で資本が存在するという意味においてである。……たとえば、工業家は彼が自由に処理できる資本(……)のうちの一部だけを生産にもちいる、なぜなら他の部分が流通から復帰するまでには、一定の時間を要するからである。このばあい生産において過程を通過しつつある部分が流動部分であり、流通に存在する部分が固定部分である。したがってこのことによつて資本の総生産性は制限されている。……また価値増殖過程が同時に価値減少として現れるというこの二つの規定への分解は、可能なかぎりの価値増殖をめざした資本の傾向とは矛盾するのであるから、資本はやはり、固定性の局面を短縮するために、もろもろの仕組みを発案する」(S. 516)。

4 「流動する資本と固定された資本というこれらの諸規定を資本一般の形態諸規定として把握することは、絶対に重要である。なぜならそれでなければブルジョア経済の多数の現象——資本の一回かぎりの流通時間とは本質的に区別される経済循環のもろもろの時期、新たな需要の影響、新たな金銀生産諸国の一般的生産におよぼす影響さえも——がわからなくなるからである。……けつして完全には使用されない、つまりつねに部分的には固定されている、減価している、不生産的であるということが、資本の本性のうちになかったならば、どんな刺

激でも資本をより大なる生産へかりたてることはできないであろう。他方では経済学者たち——リカード——さえも——がおちいつているばかばかしいもろもろの矛盾。彼らは、資本がつねに十分に使用されていると前提しているのだ」(S. 517)。

### 流動資本と固定資本の「特殊の規定」

さきの「一般的规定」は、資本だということを、種々なる諸形態をとりながら増殖しつづける価値主体の運動という面と、ある特殊形態へ拘束されているという面において流動資本、固定資本として規定するものであった。これは、同じ、一つの資本のありかたを流動と固定との統一において規定することであり、したがってここでは、資本がどの局面にあるかということ自体は問題にならないし、その資本の素材がどういふものかもまったく度外視されている。

しかしこの同じ一つの資本は、運動しつづけるものであると同時に拘束される資本だということのほか、二重に特殊の姿態で実存するものとして、または、相異なる二つの種類の資本に分裂するものとしても把握されねばならない。すなわち、生産局面に止まっている固定資本と流通局面にある流動資本というさらにすすんだ形態規定が行われねばならぬ。このばあいには、使用価値として生産過程に止まるかどうか、使用価値として流通するのかどうかという素材的区分が形態規定にとり入れられてくる。

1 「これまでは固定資本と流動資本(C.C.)とはただ資本の異った経過的諸規定として現れたにすぎないが、それらはいまや資本の特殊な実存様式に硬化しており、流動資本(C.C.)は固定資本と並んで現れる。いまや二つの特殊な種類の資本が存在する。ある一定の生産部門で一個の資本が考察されるかぎりでは、資本はこれら

二つの部分にわかれて現れ、あるいは資本は一定の比率でこれら二つの種類の資本に分解する。

生産過程の内部での区別、 $\wedge$ すなわち $\vee$ 初めに労働手段と労働材料、最後に労働生産物は、いまや流動資本(C.C.) (最初の二つ)<sup>(5)</sup>と固定資本として現れる。たんにその素材的側面からみた資本の区別立てが、いまや資本の形態それ自体のうちにとりいれられ、また資本を分化させるもの(differenzierend)として現れる」(S. 590)。

(5) この括弧内の「最初の二つ」は、「最後の二つ」の誤記であろう(あるいは誤読かも知れない)。ちなみに、すぐ前の敘述では、「流動資本(原材料と生産物)と固定資本(労働手段)」(S. 588)となっている。

2 「同一の資本が同じ事業で、固定 $\wedge$ 資本 $\vee$ と流動 $\wedge$ 資本 $\vee$ (C.C.)という二つの異なった形態、特殊な実存様式で現れ、したがって二重に実存する。固定 $\wedge$ 資本 $\vee$ または流動 $\wedge$ 資本 $\vee$ であるということが、資本であるということ以外に資本の特殊な規定性として現れる。だが資本はこのような特殊化へとすすんでいかなければならぬ」(S. 539)。

3 「……価値としては固定資本は流通する(のちにみるように、部分的に、継起的にだけであるとしても)……。それは使用価値としては流通しない。固定資本は、それがその素材的側面から考察されるかぎりでは、生産過程の契機として、その境界からけっして去らないし、その所有者により譲渡もされないで、彼の手中にとどまっている。それはたんにその形態側面からみたばあい、資本として、多年生の価値として流通するにすぎない。流動資本(C.C.)では、形式と内容、使用価値と交換価値のあいだのこうした区別は生じない」(S. 572)。

4 資本と労働能力のあいだの流通「この流通にはいりこむ資本部分——給養品(Provisionnement)——はすぐ

れて流動資本 (C.C.) である。それは形態上から規定されているばかりでなく、その使用価値……個人的消費に直接はいりこむ生産物であるというその素材的規定が、それ自身その形態規定の一部をなしている」(S. 570)。「……<sup>サレル</sup>賃銀として流通する資本部分——は、その素材的側面からみて……流通からけつして、あゆみでないし、また資本の生産過程にけつしては、いりこまないのであつて、それはつねに先行する生産過程の生産物、結果として、この生産過程からつきだされる。その一方これとは反対に、固定資本として規定された資本部分は、……使用価値としては、生産過程からけつしてあゆみでないし、また流通にけつして二度とはいりこまないのである。後者が価値として(完成生産物の価値の部分として)だけ流通にはいるのに対し、前者は価値としてだけ生産過程にはいりこむ」(S. 572—573)。

以上が、流動資本と固定資本の二様の規定であるが、これはつぎの「資本の流通における三つの異った区別」(S. 570)に照応しており、そこからひきだされるものである。

(一)「総過程——資本がその異なった諸契機を経過すること」(S. 570)。これによれば資本は流動しつつあるものとして措定され、また他方では、どの諸契機においても固定されたものとして現れるのであり、「このような固定存在の異った諸様式は異なった諸資本、すなわち商品資本、貨幣資本、生産諸条件としての資本を構成する」(同)。(二)「資本と労働能力のあいだの小流通」(同)。(三)「大流通。生産過程の外部での資本の運動」(同)——「生産局面からあゆみでる資本とこの局面のなかにふくまれている資本との対立から、流動資本 (flüssig Kapital) と固定資本の区別が生じる」(同)。

「資本の流通における三つの異なった区別から」(第一に)「流動資本 (Z.K.) と固定資本のあいだの三つの区別が

生じる。《第二に√資本の一部がすぐれて流動資本(N.K.)として措定される。……そして第三に流動資本(Lüssig)と固定資本のあいだの区別。形態No. 3における流動資本(N.K.)はNo. 2をもふくむ。なぜなら後者も同様に固定資本に対し対立しているからである。しかし形態No. 2は形態No. 3をふくまぬ》(S. 570—571)。

右の敘述からすれば、(一)の「総過程」に対応する「形態No. 1」が「一般的規定」であり、(三)の「大流通」に照応するNo. 3がNo. 2をもふくんで「特殊的规定」だということがわかる。

ところで、以上のような流動資本と固定資本の「一般的規定」および資本の「総過程」という把握を、つぎのような『資本論』第二部第一篇の敘述と対照されたい。

「総運動G—W::P::W—G」、ここでは資本は、互いに関連し制約し合う一連の諸転化、すなわちそれぞれが一つの総過程の諸局面または諸段階をなしている一連の諸変態を通る価値として、現れる。これらの段階のうち二つは流通部に属し、一つは生産部に属する。……資本価値がその流通段階でとる二つの形態は、貨幣資本と商品資本という形態である。生産段階に属するその形態は、生産資本という形態である。その総循環の経過中にこれらの形態をとっては捨て、それぞれの形態でその形態に対応する機能を行う資本は、産業資本である。——ここで産業と言うのは、資本主義的に経営されるすべての生産部門を包括する意味で言うのである」。

「他方、循環そのものが、一定の期間個々の循環段階に資本が固定する(Fixierung)ことを必然にするということは、事柄の性質上当然のことである。産業資本は、その諸段階のそれぞれで一定の形態に、すなわち貨幣資本、生産資本、商品資本として、拘束されている」(M.E. werke, B. 24, S. 56—59; 訳入大月/P. 66)。

「……連続的に行われる産業資本の現実の循環は、ただ単に流通過程と生産過程との統一であるだけではな

く、その三つの循環全部の統一である。しかし、それがこのような統一でありうるのは、ただ資本のそれぞれの部分が循環の相続く諸段階を次々に通り過ぎることができ、一つの段階、一つの機能形態から次のそれに移行することができる、したがってこれらの部分の全体としての産業資本が、同時に別々の段階にあって別々の機能を行ない、こうして三つの循環のすべてを同時に描くというかぎりでのことである」(Ib. S. 107)。

「自分を増殖する価値としての資本は、階級関係を、……含んでいるだけではない。それは、一つの運動であり、いろいろな段階を通る循環過程であって、この過程はそれ自身また循環過程の三つの違った形態を含んでいる。だから、資本は、ただ運動としてのみ理解できるのであって、静止している物としては理解できないのである。価値の独立化を単なる抽象と見る人々は、産業資本の運動が現実におけるこの抽象だということを忘れていたのである。価値はここではいろいろな形態、いろいろな運動を通じて行くのであって、この運動のなかで自分を維持すると同時に自分を増殖し拡大するのである」(Ib. S. 109)。

みられるように、『資本論』では、生産過程と流通過程との統一としての総過程全体を通じて貨幣、商品、生産要素という諸形態をとっては捨てて自己増殖をつづける運動としての資本が産業資本だと規定されている。また同時に、この産業資本はその運動中で、右の諸形態に拘束され、固定化される必然性があるとのべられている。こうした把握と、流通過程と生産過程とをふくむ総過程において、「ある規定から他の規定に循環しつつある△ところの資本▽」すなわち貨幣、商品、生産諸条件という諸形態をとりつつ自己増殖の運動をつづける主体としての資本それぞれを流動資本と規定し、他方ではこの同じ資本を、右の特殊な諸形態の一つに拘束され固定化されざるをえぬ面で固定資本と規定する『要綱』の把握とは、基本的には一致しているものと考えざるをえない。

もつとも、『資本論』の把握においては、『要綱』の規定のさいにはみられなかったような立ち入った規定、すなわち産業資本の循環は三循環の統一だという規定が行われるようになっていし、さらに特殊な一形態へ拘束されている面での産業資本が固定資本という概念を使ってあらわされていない。しかし、前述したような基本的な点での一致がみられる限り、流動資本と固定資本の「一般的规定」はやがて『資本論』の産業資本に関するさきの規定へと仕上げられてゆくものである考えられる。

『資本論』第二部第一篇で産業資本概念が規定されるさい流動資本、固定資本という概念がもちいられていない点についていえば、①資本価値が総過程でとらざるをえぬ三つの形態とその循環形式の特質をとらえ、②資本を、右の諸変態・諸循環中に自己増殖しつづける運動主体Ⅱ三循環の統一そのものとして規定し、③この主体が特定の姿態に拘束され制限されること（したがってまた、この諸制限を突破しようとする資本の傾向）を説明するばあいには、従来までの伝統的な流動資本、固定資本という種々の混乱した内容を内包している概念をもちいる必要がないばかりか、むしろこの概念を第二篇で資本の回転様式という視点から正確に規定して、従来までの混乱を正しておくべきだと考えられたからであろう。

なお、形式的対比でしかないが、産業資本の概念を、三つの諸形態をとりつつ自己増殖している主体的価値の運動そのもの、という側面に限って一面的にとらえ、これとさきの流動資本の概念とを照応させてみるばあいには、貨幣資本、商品資本、生産資本のそれぞれが固定資本の概念に照応しているとみなすこともできよう。

なおまた、『要綱』のばあいには、流動資本の「一般的规定」に対する固定資本が、種々の諸局面に休止し遊休している資本すなわち遊休資本としても把握されていた。<sup>6)</sup>このように固定資本が遊休資本としてとらえられる限りに



おいては、『要綱』の右の固定資本は、『資本論』第二部第一篇等でつぎのような意味でのべられている「遊休資本」あるいは「資本の遊休」という概念にも照応しているとみなすことができる。すなわち、三つの諸循環において「資本は、貨幣の姿でいるあいだは資本として機能しないのであり、したがってまた価値増殖もされないものである。資本は遊休しているのである」(Ib. s. 78)。「ただし他方では、「その運動の中止、その流通中断の状態」としての「貨幣状態が、その諸段階の一つにある産業資本にとって循環の関連によって規定されている状態……」(Ib. s. 82)だという面も看過してはならない」。

「労働期間をこえる生産期間の超過」は、「つねに、生産資本が生産過程そのもので機能することなしに潜在的に生産部面にあるということに……もとづいている。潜在的な生産資本のうちで、ただ生産過程の条件として準備されているだけの部分、たとえば紡績業での棉花や石炭などは、生産物形成者としても価値形成者としても働いていない。この部分は遊休資本である。といっても、その遊休は生産過程の中断されない流れのための一条件をなしているのである」(Ib. s. 125)。

以上、『要綱』における流動資本と固定資本概念の「一般的規定」に対応するものとしての、『資本論』第二部第一篇の産業資本の規定について明らかにした<sup>(8)</sup>。これに対して、流動資本と固定資本の「特殊的規定」は、一面で、『資本論』第二部第二篇における流動資本と固定資本の規定と同じ内容を有しているように思われる。

この点は、さきほどの「特殊的規定」についてあげた引用の3、およびつぎのいくつかの諸敘述をみるだけでも明らかであろう。

労働手段は「いまやその素材的側面からみて労働の手段として現れるばかりでなく、同時に資本の総過程

「〔資本の総体運動(回転)〕同ページより補足、引用者〕によつて規定された資本の特殊な一定在様式として——固定資本として——現れる」(S. 583)。

「過程それ自体の内部では労働諸要素と他の二つの要素との区別は、形態からみて、たんに、一方が不変的諸価値として、また他方が価値産出的なものとして規定されるということだけであった。だが素材的側面である諸使用価値としての差別が問題となるかぎりには、この差別はまったく資本の形態規定の外のものであった。だがいまや流動資本(C.C.) (原材料と生産物)と固定資本(労働手段)との区別においては、諸使用価値としての諸要素の区別が同時に資本としての資本の区別として、資本の形態規定において措定されている。たんに量的であった諸要因相互の関係は、いまや……資本の総体運動(回転)を規定するものとして現れる」(S. 583)。

「第一に、固定資本の価値の復帰は継起的であるが、他方流動資本(C.C.)にあつては価値の実存が使用価値のそれと合致する……(という)区分がある——引用者)。第二に、……あたえられた資本の平均回転時間におよぼす固定資本の影響「から」ばかりでなくて、対自的に考察されたばあいの資本の回転時間におよぼす固定資本の影響「から」▲生じる区別▽。……ついで固定資本が更新、維持される様式」(S. 578)。

「流動資本は……流通に全部的にはいりこんだ」。「これに対して固定資本はそれ自身は使用価値として流通しないで、それが生産過程で使用価値として消耗されるその程度でだけ、価値として加工原料か(……)、または直接抽出された粗生産物に(……)はいりこむ。だからその発展した形態での固定資本は、流動資本(C.C.)の一連の諸回転を包括する、幾年にもわたる一循環ののちにだけ還流する。……流動資本がより短かい期間に、部分的に流通するのに、固定資本はより長い期間に断片的に還流する」(S. 609)。

「だから流動資本（N.C.）の回転は、総時間としての一年のあいだの回転の回数によって規定されたのである」。「固定資本の介入によって以上のことは変更され、そして資本の回転時間も、その回数を測定するため単位である一年も、もはや資本の運動にとつての尺度時間としては現れない。いまやむしろこの単位は、固定資本にとつて必要とされる再生産時間と、したがって固定資本が価値として流通にはいりこみ、ついでその価値総体において流通から復帰するのに要するその総流通時間とによって規定される。……固定資本の大規模な発展以来、十年前後の期間で産業が通過するところの循環が、このようにして規定された資本の総再生産局面と関連しているということは、まったく疑問の余地がなく」（S. 608）。

みられるように、ここでは、生産過程内部での資本の素材的区分に基礎をおいた資本の流通様式・回転様式の相違から、流動資本、固定資本の区別が説かれている。したがって、流動資本と固定資本の「特殊的规定」は、『資本論』第二部第二篇での流動、固定資本の規定と共通する内容をふくんでおり、したがってまた、「一般的规定」と「特殊的规定」という二様の規定を通して、『資本論』第二部における第一篇と第二篇との関連の把握が、基本的な点では当時すでに準備されようとしていたことが推察できる。

しかし、流動資本と固定資本の「特殊的规定」に関する敘述中には、たしかに、右のように一面で、『資本論』第二部第二篇の規定と共通する面も説かれているが、そうばかりとはいえない敘述もみうけられるし、またそうとはいえない説明がその規定の主要な側面になっていると思われる敘述すらある。またその敘述をみると、流動資本と流通資本との混同が犯されているのではないかと思われるばあいがある。そこでつぎに章をあらためて、流動資本と固定資本の規定——とくに「特殊的规定」——についてより一層立ち入って検討することにしたい。

(6) 「けつして完全には使用されない、つまりつねに部分的には固定されている、減価している、不生産的であるということ」が、資本の本性のうちになかったならば、どんな刺激でも資本をより大なる生産へかりたてることはできないであろう」(S. 517)。「あらゆる局面を通過する主体としての、流通と生産との動的統一……としての資本は流動資本である。……休止資本、遊休資本の概念は、資本がこれら諸規定の一つに遊休しているということにだけ関係しうるのであって、資本が部分的に遊休しているということは、資本の条件である。このことは、国民的資本の一部が、資本の通過しなければならぬ諸局面の一つにつねに定着状態にあるというかたちで現れる」(S. 515)。「われわれがさきにもちいた意味で固定された資本、すなわち固定されている、処分できない、利用できない資本では、第一に J・St・ミル(……)。資本の総流通過程の一局面における定着。この意味ではミルが、さきの諸引用でのベイリーのように、一国の資本のますます大きな部分が遊休するのべっているのは正し」(S. 535)。

(7) この諸引用における遊休資本概念は、資本が価値形成者として働いておらず、直接には資本として機能してはいないが、資本循環の一定段階に止まっているという意味でいわれている。だが、「資本の遊休」あるいは「遊休資本」は、資本の運動の具体的内容に応じて、種々の発展した内容をもつ。したがって、たとえば、産業資本の運動局面の外部で、「貸付のために提供されていて有利な投下を求めている遊休資本」(Ib. B. III. S. 499)という意味でいわれるばあいや、資本の過剰との関連で、競争を通じて「資本のある部分は全部または一部分遊休し(……)、また他の部分は、遊休資本または半遊休資本の圧迫によって、より低い利潤率で増殖されるであろう」(Ib. B. III. S. 262)というようにいわれるばあいもある。しかし、こうした点については、本稿の課題とはずれるのでこれ以上立ち入らない。

(8) これまでみてきた流動資本、固定資本の「一般的规定」には、流動資本と流通資本との混同があるという見解がある。「さてマルクスはこの資本の循環の各契機を『生産資本』……商品資本及び貨幣資本として把握するが、この資本の流通過程での姿態変換を流動資本第一形態(わたくしのいう「一般的规定」——水谷)と之に、照応する固定資本との姿態変換として把握し直す。曰く、『主体として、この運動の種々な局面を次々に移ってゆく、その中で自己を維持し且つ倍化する価値、この変態の主体として、循環経過において——螺旋線として、自己を拡張する循環として進んでゆく主体として——資本は流動資本(Capital Circulant)である。流動資本はだから差し当りは、何等資本の特殊な形態ではなく、それは増々発展してゆくと云

う規定における、即ち価値増殖過程としての自己自身がそれである処の、循環を描く運動の主体としての資本一般 (das Kapital) である。この側面からすれば、どの資本も亦流動資本 (das zirkulierende Kapital) である』 (S. 570)。然し他面、資本は循環の『どの階梯においても一つの規定において、即ち、全運動の主体としての自己の否定である処の特殊な姿態に結びつけられたものとして』、即ち『非流動資本 (Nicht Zirkulierende Kapital)、資本が通過せねばならぬ処の種々な規定、階梯の一つに固定された、固定資本』 (S. 514) として措定され、そして『この固定的存在の種々の様式』 (S. 570) が、生産資本、商品資本、貨幣資本なのである、と。ここには明らかに流動資本と流通資本との混同——スミスの前提を伴わないが而もスミスの資本分類の残滓——がある。従って凡べての生産物、だから社会の総生産物もそれが流通する限り流動資本であり——スミスにおける『社会の流動資本』なる概念に注意——、この点からも生産物の価値構成を  $c + v + m$  と把握する道が閉ざされる……』 (小林賢齊「再生産表式と資本の循環・回転——『表式』成立過程の一考察——」八東大経済学会、『経済学論集』第二五卷第三・四合併号/V八八—八九ページ。この論文は、多くの疑問点をふくむものとはいへ、『要綱』における流通過程の検討を行い多くの問題提起をした、おそらく最初の力作の一つであろう。わたくしが右の見解をとりあげるのは、あくまで当面の問題を明確にするための一材料としてにすぎない)。

右の主張をみると、マルクスの敘述の引用からだに「ここには明らかに流通資本と流動資本との混同がある」という断定が行われているが、なぜ、どういう点でそういう断定がされるのか、いろいろな意味が考えられ、これだけをみても十分に理解しえない。ただ、すぐあとの文章をみると、三姿態をとって運動する資本を流動資本とする点で流通資本との混同が犯され、そこから総生産物を流通する限りで流動資本と規定してしまふ——この点でスミスにおける『社会の流動資本』概念に注意 (スミスはこの概念のもとで、本来の流通過程にある資本と流通資本と、流動資本とを混同している(水谷))——、という説き方がみられる。そこから察すると、右の主張は、三姿態をとりつつ運動する主体としての資本そのものを流通資本(本来の流通にある資本)だとみなしたうえで、この流通資本を『資本論』でいわれている意味での本来の流動資本と呼称してしまふことを混同だとしているようにも推察できる。

仮にそうであるならば、すでにみたようにここでマルクスが流動資本(「一般的規定」)だといっているものは、本来の流通資本ではなくて産業資本なのであり、同一の用語を使いつつも「特殊的规定」の流動資本とは内容上で厳密に区別しているのだから、批判はまとはずれだといわねばならない。後述するように、本来の流動資本と流通資本との混同があるかどうかと

いう問題は、流動資本の「特殊の規定」の内部で検討した方が適切であろう。つぎに、流動資本の「一般の規定」においては、「 $P \cdots P$ 」型という生産資本循環しか折出されないとはいえないというもう一つの主張について。

「然しマルクスはここでは貨幣資本の循環を折出する事が出来ない。蓋し彼は、当時は、『貨幣の然るべき比例での、生産的資本としての原料、労働手段及び労働……への転態』( $G \rightarrow W \rightarrow A$ )は、『資本一般ではなく、多くの資本が問題となる時に初めて考察され得る』(S. 419—420)と規定し、又特に『資本の一部の生きた労働との交換』( $G \rightarrow A$ )は『労賃等の篇に属する』(S. 420)と考えてゐるからである」(前掲八七ページ、傍点小林氏)。形成された資本から出発するまでは資本が通過する諸階梯は、「第Ⅰ階梯は直接的生産過程(その結果は生産物)、第Ⅱ階梯は……生産物の商品への転化、第Ⅲ階梯は、(A)商品の貨幣への転化、(B)貨幣の生産諸条件への再転化及び第Ⅳ階梯は生産過程の更新である、と。(こうマルクスはいう——引用者)。従つて彼がここで把握した資本の循環形態は $P \cdots P$ 型にすぎない(前掲八七ページ)。

資本の総過程は概念的には $G \rightarrow W \rightarrow A$ から始まるが、生成した資本から出発するばあいに資本の通過局面は右のとおりであるという敘述は、マルクスが $P \cdots P$ 型しか把ええないでいることの論拠にはならない。もっとも右の主張の論拠も、直接には $G \rightarrow A$ が資本一般でなく労賃その他であつかわれるという『要綱』の敘述に求められている。だが、その敘述でマルクスがのべようとしているのは、剰余価値の発生を明らかにするために不可欠な $G \rightarrow A$ をあとまわしにすることではなく、労働力と生産手段との貨幣の分割比率や労働市場の問題に関してはあとまわしにすることにはすぎない。

「Ⅲ 適当な比率での貨幣の原料、労働手段、労働への転化つまり生産的諸要素としての資本の諸要素への転化。Ⅳ 資本の一部と生きた労働力能との交換は特殊な一契機として考察することができ、またそのように考察しなければならぬ。と。いうのは労働市場は、生産物市場とは別の諸法則によつて規制されるからである。ここでは人口が重要事項である。……契機Ⅲは、資本一般ではなく、多数の資本を論ずるときになつてから考察することができ、契機Ⅳは、労賃等にかんする篇に属する」(S. 419—420)。

それゆゑ、右の『要綱』の敘述もまた、貨幣資本循環が折出されていないことの論拠にはならない。

前章の考察からも明らかのように、『要綱』では、いわば「 $G \cdots G$ 型」こそ資本の一般的運動形態だという点は単純な貨幣流

通に対する資本流通の特徴、資本流通において貨幣がうけとる形態諸規定、貨幣の還流、運動等の考察中で明らかにされている。また、この考察のなかで（あるいは価値増殖過程の考察のなかで）労働力能と労働手段とが右の増殖過程にはたす相異なる役割も明らかにされている。だからこれらのことをみるだけでも、流動資本の「一般的規定」において貨幣資本循環が折出されていないなどは到底いえない。それどころか、運動主体としての価値を最もよく表現するものが貨幣にほかならないことはマルクスが再三指摘するところであり、「G……G型」の循環をつかみえずして資本流通の分析そのものが不可能になることを思えば、さきの主張はまったくの誤解だといえよう。

（未完）